

保育のヒント～「科学する心」を育てる～

興味を深め表現へ～ダンゴムシ～／社会福祉法人射水万葉会 射水おおぞら保育園

子どもたちが大好きなダンゴムシ…。園庭を探索していた子どもたちが、ダンゴムシを発見したり、他の場所にもいないかと、夢中になって探したりする姿が見られる園も多いのではないのでしょうか？

掌の上でダンゴムシの赤ちゃんが卵から孵るという感動体験をした子どもたちが、さらにダンゴムシへの興味を深め、身近な素材を使った表現にも繋がった事例をご紹介します。保育者の子どもたちを受け止める丁寧な関わりが、子どもたちの主体的な取り組みを支えていることが読み取れます。



○ダンゴムシの世界／5歳児

✿ 事例1 「出てきたー！！」（6月中旬）

- 子どもたちが、園庭でダンゴムシを探している。溝の蓋を開けたり、園庭の隅々を探したりしている。

Aちゃん：「先生ーっ！ダンゴムシ見付けたよ。これでかいよ！」

保育者：「ほんまやー、すごい大きいねー！」

Aちゃん：「あ！しかもこれ…メス！」と言い、ひっくり返してダンゴムシのお腹を見せる。

Bちゃん：「これ卵なんやぜ！ほら、ここ」と、黄色く膨れているところを見せる。

保育者：「えー！！これダンゴムシの卵なんやー」

Aちゃん：「…あっ！先生、なんか…」じっと自分の掌を見つめる。「ほら、赤ちゃん、赤ちゃん出てきたー！」

保育者：「どこ？どこ？」

Aちゃん：「ほら！ここ！歩いとるー」

保育者：「どれどれ！？」

Aちゃん：「白いやつ、小さいやつ、ほら、ここやぜ！」

保育者：「本当やー！！赤ちゃんやー！！」

Aちゃん：「動いとるー！」

Bちゃん：「すっげー！」「赤ちゃんって白いんやー」

Aちゃん：「あれ！？また（おなかの中に）戻って行った」「あー、また出てきたよ！」

保育者：「ダンゴムシの赤ちゃんって白いんやね。一匹だけじゃないみたい」

Bちゃん：「ほんまや、ここにもおる！ここも！！」

Cちゃん：「すっげー！！」

- その後、ダンゴムシへの興味を深めていった子どもたち。ダンゴムシが、いろいろな所を歩く様子をよく観たり、ダンゴムシがいるであろう場所を予想して探したりする。また、ダンゴムシが掲載されている絵本や図鑑を友達と真剣に見る姿もあった。図鑑や友達から新たな情報を得てさらに興味を深め、ダンゴムシのことをもっと知りたいという姿へと繋がった。



✦ 事例2「またやぶれた…」（7月上旬～中旬）

- Dちゃん：「見て見て！これダンゴムシの殻やよ！」
保育者：「えっ！そうなん？なんで殻あるん？」
Dちゃん：「だってダンゴムシって大きくなると殻脱ぐんやぜ」
Eちゃん：「そうやよ、そして大きくなるんやからこれ殻なん！」
保育者：「でもさ、殻小さいぜ？」
Dちゃん：「…うんそうやね。小さいね。調べてみる」
Dちゃん：「先生！またあったよー、ほらー！」
Dちゃん：「分かったー、ここに書いてあった、まず半分から後ろの殻抜くんね、そして次ら脱ぐんやって！そして一年間で大人の大きさにになるんやー」
保育者：「へー！ダンゴムシってそうなんやー」と、受け止める。殻を脱ぐということに興味をもっていた子どもたちが、作って表現したいと思った時に実現できるようにと、一つの素材として、新聞紙を子どもたちの近くに置いておく。

- 子どもたちは、自分の体に新聞を巻き付け始める。セロハンテープで貼り付けるがうまくいかない。保育者は、違うテープに気付くよう言葉をかける。
Fちゃん：「もっと大きいやつがいい」と言って、ガムテープを付け始める。うまく付くと満足そうな顔をする。
保育者：「それ面白いねー、Fちゃんダンゴムシやね！こんなんにしたから脱げるね」



- 脱いで見せるFちゃん。それを見ていた他の子どもたちは「何しとるん？」「したい」と、集まってくる。

- 夢中になる中で友達とのやり取りも膨らんでくる。
Fちゃんは、ガムテープで貼り直したいが、なかなかテープが切れない。そして、何度もやるうちにコツをつかむ。この遊びが友達に広がり、みんなでダンゴムシの殻作りが始まった。そして、殻を着てダンゴムシになり、ごっこ遊びになる。
Fちゃん：「なんか手出すとこ作りたい」と、ハサミで切ろうとするがうまくいかない。何度か繰り返す。切れたものが新聞紙にくっ付いたり、手で丸まったりしながら試行錯誤している。
Gちゃん：「お尻から脱ぎたいんやけどどうしたらいい？」
保育者：「ダンゴムシみたいに先に後ろから脱ぎたいの？。じゃあみんなって服脱ぐ時どうやって脱ぐ？」と、友達同士で考え合えるような言葉をかける。

- しばらく考える子どもたち…。
Dちゃん：「ズボンみたいにしたらいいんか」
Eちゃん：「ギゅってしたら脱ぎにくいわー」
Hちゃん：「フワッとしとこ」と言って試してみる。「脱げたー！」と、上着を脱ぐ。
Fちゃん：「あ！破れたー」
Iちゃん：「ここに手入れるとこ作って本当の殻みたいにしたい」
Hちゃん：「じゃあさ、ここくっ付けてこうしたら？」
Iちゃん：「あっ、いいね！」

- 子どもたちは、何枚もガムテープを貼り続け、着て動いてみる。破れると、また考えてまた貼り直すことを繰り返す。
Hちゃん：「先生、破れんくなった」
保育者：「ほんまや！」
Jちゃん：「ここ一人でできん」
Kちゃん：「取れてくるー！」と言うと、横にいたLちゃんが押さえている。
保育者：「Lちゃんが、持ってくれたらできたね」
Hちゃん：「持っとっちゃ、ここ貼って」と、友達と交代しながら作る。
保育者：「Eちゃんそれは？」と尋ねる。



- Eちゃん：「ダンゴムシってさ、足に毛生えとるん、だから付けとる」と、言いながら、新聞紙を細かく切って手にたくさん貼り付けている。それを見て、他の子どもも作り始める。そして、みんなでダンゴムシのように歩き出す。
Dちゃん：「あっ、ダンゴムシって端っこ歩くんやった！」
Jちゃん：「敵や！」と言うと、丸まったり途中で殻を脱いだりして表現している。
その後も、ダンゴムシになって動くことを楽しむ、ごっこ遊びが続いた。さらに、遊びを通してダンゴムシの餌や体のつくりや雌雄についてなどへと興味が深まっていった。

- 掌に載せて触って感じた感動体験があったからこそ自分たちで表現してみたいという姿に繋がったのではないだろうか。また、表現することで、さらにダンゴムシのことを知りたいという姿に繋がった。
- ダンゴムシにたくさん触れて気付いたこと、驚いたという同じ体験を、一人一人が感じ、友達と共有していることが仲間意識に繋がっている。
- 子どもの考えたことにじっくり付き合ったり、認めたりする保育者の関わりがあるからこそ、子どもの考える力を高めていけるのだとも思った。
- 「面白かった」「凄い」「びっくりした」という体験が、「もっと！自分で知りたい！調べたい！表現したい！」という気持ちの高まりになり、子どもの主体性の育ちへと繋がるのではないかと感じた。

無断転載を禁ず。引用する場合は右記を必ず明記願います。「(C)公益財団法人 ソニー教育財団 ソニー幼児教育支援プログラム 幼児教育保育実践サイト <http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/>」